

デザインの本意 (p.80~p.83)

|                               |                   |
|-------------------------------|-------------------|
| 漢字                            |                   |
| ①用途                           | 2 単純 3 鈍 4 胴 5 携帯 |
| 6 縮 7 貼 8 鉤物 9 延長 10 秩序       |                   |
| 11 上達 12 熟成 13 精巧 14 啓発 15 水滴 |                   |
| 16 研磨 17 蓄積                   |                   |
| ②1へんてつ 2じやぐち 3わ 4ふた           |                   |
| 5きかがく 6かいこ 7たいせき              |                   |
| 8しようこう 9びんせん 10どうか            |                   |
| 11そくおう 12りつきやく 13おと           |                   |
| 14ひょうしょう 15はぐく 16ころざし         |                   |
| 17ぼつこう                        |                   |

語句

- ①真意。根本となる意義。本義。
- ②現れ出る。明確な形を取る。
- ③頭に思い浮かべたもの。象徴。シンボル。
- ④1 帰納 2 特殊 3 偶然
- ⑤1 実際に行ってみると、何の変哲もない地方の小都市だった。
- ⑥2 あまりの美しさに目を奪われる。
- ⑦3 叔父はいつも、時代がかった言い方をする。

要旨の整理

- ア日常 イ生活 ウ気づく エ幾何学  
オ簡潔 カ知恵 キ球技 ク精度  
ケ暮らし コ啓発 サ用 シ環境 ス豊かさ
- ①「要旨整理のポイント」  
・導入として柳宗理のデザインした薬缶が取り上げられ、その魅力が語られている。  
・第二段落では、デザインとは作るだけでなく、暮らしや環境の本質に気づくことにその本意がある、と本文の主題が述べられ、続けて、人類は世界を四角くデザインしてきたことが説明される。  
・第三段落では、円もデザインに用いられてきたこと、また、完全な球体に近いボールが作られるようになる

と球技も高度化したことが示され、近代科学の発達と球技の関連が述べられている。

最終段落では、優れたデザインは人の行為の普遍性を表すため、デザイナーは暮らしを啓発する物の形を追求する、とされている。志を持って形を作り環境をなすことがデザイナーであり、富の蓄積とは違った豊かさにつながることに思いを致すべきだと訴えている。

- 要旨  
ア環境 イ本意 ウ普遍性 エ暮らし オ志  
力経済 ●百字の要旨

優れたデザインは人の行為の普遍性を表象しており、デザイナーは暮らしを啓発する物の形を追求している。デザインとは、志を持って形を作り環境をなし、経済の勃興を目ざすだけでは得られない豊かさを作ることだ。(九十九字)

内容の理解

- ①「日常の動作にきれいに寄り添っている」(十七字)
- ②「消費の欲求に駆られて新しさを追い求めていたから」
- ③「ノスタルジー」
- ④「1ウ」
- ⑤「2 やや冷静になって、ということ。」
- ⑥「1 覚醒していく」
- ⑦「2 人間の環境に織り込まれた膨大な知恵の堆積の一つ 一つ(二十五字)」
- ⑧「四角は人間にとって最も身近な最適性能あるいは幾何学原理だったから。(三十三字)」
- ⑨「1ウ」
- ⑩「2 デザインがいていかな(三十八字)」

することを躊躇する「大木」に、「西田」は「予定が組まれたら進まなきゃならない、それが生きるってこと」(「下」)と述べる。「西田」は夫を亡くしているが、生きるために前進しなくてはならないと感じ、「大木」も離島赴任への不安を乗り越えざるを得ないと感じ、この点に触れていないアは誤り。また、「西田」は「社会全体」のために離島へ赴任すべきだと言っているわけでも、「被爆の苦しみ」自体の克服を促しているわけでもないため、イ・エも誤り。

④「悪性貧血に悩まされ」(一七二・上9)、「両親の庇護を受けて生活していた」(同上12)という「原」にとって、「生きる」とは生命を維持することであり、それは「西田」の言う「生きる」ことの内実とは異なっている。「ただ生きてきただけ」という言葉からは、原爆症のために仕事や結婚を諦めざるを得なかった自身の人生に、むなしさや無念さを感じていることが読み取れる。アの「満足感」ウの「慰み」エの「誇らしさ」はいずれもこうした文脈にそぐわない。

⑤「大木」の離島赴任の問題に見られるように、人生の岐路における決断の根幹にはいつも「被爆」が大きく関わっていることを言っているのである。

⑥「明滅」とはいつたり消えたりすること。ここでは、感じられなくなり消えたりする「痛み」を表している。

⑦「T先生の最後の言葉」(一七四・下3)を理解したいという「きぬ子」の思いはやがて「心の負担」となり、「あの情景が事実だったのか、T先生は本当に死んだのだらうか」(同上9)と疑うまでになつてしまった。この点をふまえて解答する。

⑧「両手で抱き上げる」のは、とても大切なものを丁寧に取り扱う動作である。

⑨「空き缶」は、両親の骨を拾い、毎日学校へ持参していた少女の悲しみや寂しさ、心の痛みを表している。

⑩「大木」の「ガラス片」と同様、三千年間「きぬ子」が内部に抱えていた「痛み」は、時間の経過という「脂肪」で包まれながらも、一生消えないものである。

暮らしを啓発する、物の形(十二字)

国イ  
国ア

①読者のポイント

①設問部分は、柳宗理の薬缶の魅力を説明する一文であり、日常的に使う道具としてのすばらしさが述べられている。同じ内容の一文を探せばよい。

②で確認したように、筆者は「柳宗理の薬缶」(一八〇・6)について「日常の行為を無理なく自然に行うための道具として、すばらしくよくできている」(一八〇・6)、「日常の動作にきれいに寄り添っている」(一八一・5)と評価している。このことから、「用の美」とは「人の求める実用性が暮らしの道具の形にもたらした美しさ」を意味すると考えられる。イ・ウはそれぞれ「使いやすさ」と「美しさ」のいずれかを一方よりも重んじており、誤り。エは、「この感覚は決して懐古趣味の流行やリバイバル・ブームではない」(一八一・1)という記述に反する。

③「目をつけたのは、幾何学的で先鋭的なデザインのケトルに目を奪われていたのは「少し前まで」のこと、最近ではそうではないということだ。現在とは異なるかつての「僕ら」の感覚を答える。

④「懐古」とは、昔の情緒や風俗などを懐かしく思うことをいう。

⑤「目」を三角にして」とは、通常、怒りのあまり目がつり上がっているさまをいい、「激怒して」などと言ひ換えられる。本文では「消費の欲求に駆られて……」「新しさ」を追い求めていた(「一八一・1」)という文の中で用いられているので、新しさを追い求めることに必死になつて、余裕がないさまを表していると考えられる。ウの「血眼になつて」は、我を忘れて一つのことに奔走するという意味なので、これが正解となる。

⑥「平熱に戻って」に続く文章が「まともに日常の周囲を見渡すゆとりができた」となっていることに着

目する。アタマが平熱に戻った結果、精神的に余裕が持てるようになったということである。そこから比喩の意味するところを推測する。

①「デザインの本意を説明している部分である。設問部分直前の一文をふまえると、「生み出す」↓「作る」、「物を介して暮らしや環境の本質を考える」↓「気づく」という対応が見えてくる。

②「暮らしや環境の本質」に気づく、では、指定された字数の半分にも満たない。1で探し出した語句を、新たな手がかりとしよう。

③設問部分に呼応しているのは、一八二ページ目行目の「おそらくは」で始まる一文である。ただし、すぐにここから答えを作るのは早計だ。同ページ15行目に「つまり四角とは」とあることに着目しよう。設問の答えとして、どちらの語句を使った方がよりよいかを検討すること。

④造化とは、①天地を創造した造物主・神、②天地・万物・自然、を意味する。「造化の妙」とは慣用表現で「自然の見事さ・美しさ」の意。ここでは「完璧な立方体の鉱物の結晶」(一八二・9)のことを言っている。

⑤まず、パソコンや携帯電話のフォルムを思い浮かべてみよう。そのほとんどが四角である。人間は環境を四角くデザインしてきた、という文脈にも当てはまる。ということとは、筆者はここで、最先端の物であっても「古典的」、「つまり昔から引き継がれている伝統的な四角」というフォルムをしていると指摘している。ア・ウ・エは、四角が「古典的」とされる理由になつていない。

⑥筆者は、初期の石器に正円がくり抜かれていたのを、回転運動から探り当てたのではないかと推測した後、「いずれにしても……基本となつている」(一八三・9~10)と述べている。ここで言われている「簡潔な幾何学形態」とは、文脈から四角と円をさすとわかる。筆者は第二段落後半で、人間にとって四角とは「最も

身近な最適性能あるいは幾何学原理だった」ため、人類は環境を四角くデザインしてきたと説明していることを思い出そう。

①設問部分の直後に、「つまり」で始まる言い換えの文章がある点に着目する。アは、理由と結果がかみ合っていない。完全な球体に近いボールが作られるようになつて、ボールのリアクションも一定となったのである。イは、ボールの動きは物理法則に基づいていることとわかつたゆえに、人は球技を楽しむようになった、ということになるが、そのような記述はない。ウ「完全な球体に近いボール」は、球技の上達のために必要だとされている。

②「球技の技能も高度化してきた」(一八四・7)が見つかると、より簡潔に表現している箇所を探す。

③「球と球技の関係を説明する部分を探し出せば、続いて答えに当たる部分も見つかる。」

④「ここでの「形」とは、人の行為の本質に寄り添い、暮らしや文化を醸成させるようなデザインのこと。そのような形を見いだそうとする、という内容を探す。

⑤「水流」という語句は、一八五ページ目行目に「川の流れに」と出てくる。この一文をふまえているのである。

⑥「イは「デザイナーは何を目ざすべきなのだろうか」が誤り。筆者は第四段落で、目ざすべきデザイナーのあり方をはつきりと述べている。ウは、一八五ページ4~8行目の「民芸」の説明になつていて、筆者は「その視点には深く共感できる」(同・8)としながらも、「しかし……待つわけにはいかない」(同・9)と論を展開している。エは本文にある内容だが、「ボールを丸く作」という表現を文字どおりに解釈してしまつていて、一八四ページ14行目に、「精巧な球を作るように、形を見いだそうと努力する」とあつたことを思い出してほしい。

- 漢字
- 1 我慢 2 気候 3 交渉 4 恐怖 5 激励
  - 6 座敷 7 巢 8 触角 9 縮 10 緩 11 騒
  - 12 懸命 13 類 14 襲 15 道幅 16 怖 17 臨
  - 1 ちめいしよう 2 かんじん 3 さんきよう
  - 4 あや 5 みよう 6 との 7 らんかん
  - 8 た 9 こうでい 10 つた 11 がいかい
  - 12 さいご 13 にな 14 いかかつ 15 そうい
  - 16 くら 17 そ

語句

- 1 あいだ。2 くだること。
- 3 突然調子外れの言動をする様子。4 死に際。
- 1 間 2 首 3 尽
- 1 飛行機事故は一つ間違えば大惨事になってしまう。
- 2 彼はいかにも若者らしい発言をする。

要旨の整理

- ア後養生 イ恐怖 ウ親しみ エ静かき オ動騒  
カ嫌な キ偶然 ク差 ケ寂しさ
- 要旨整理のポイント
- 第一段落では「自分」が城崎温泉にきた理由が、第二段落ではそのときの生活ぶりや心境が語られている。この二つの段落は、内容的には一つにまとめて読解してもよいが、第六段落との呼応で分けておく。
  - 第二段落での「自分」の心境に注意する。自己の「死」を想像すると「寂しい」「恐怖させない」考えが浮かび、心が静まり、「死に対する親しみ」が起きている。
  - 第三段落では「蜂」の「死」を見つめる「自分」の心境を把握することが大切である。「静かき」と「寂しさ」を感じている「自分」であるが、その「静かき」に親しみを覚えている。そして小説でも、殺されて土の下に眠る妻の気持ちを写してみたいという欲求が起きている。第四段落では「ねずみ」の「死」を見つめる「自分」の心境を把握することが大切である。首に魚くしを刺

されたまま一生懸命助かろうとするねずみを見て「自分」は「寂しい嫌な気持ち」になる。「死後の静寂に親しみを覚える」ものの、「死に到達するまでの」「動騒」を恐ろしく感じ、自身の事故を振り返る。

第五段落では「いもり」の「死」を見つめる「自分」の心境を把握することが大切である。驚かしてやろうと投げた石が「いもり」に命中して、「自分」は「いもり」を殺してしまつた。「偶然」の「死」に「生き物の寂しさ」を感じた「自分」とは、事故で「偶然」死ななかつただけで、「生」と「死」は「両極」ではなく、「差」はないのだと悟る。

第六段落では第一段落の「三週間」以上は滞在せず、城崎を去つたことが語られている。「蜂」「ねずみ」「いもり」の死に接して、「生き物の寂しさ」を痛感した「自分」はそれ以上長くは滞在できなかつたと読み取れよう。

●主題

ア蜂 イ静かき ウ運命 エねずみ オ到達  
カいもり キ両極 ク差 ケ寂しさ

●百字の主題

養生先の城崎で、初めは死の静かさに親しみを覚じていた「自分」は、三つの小動物の死に接することによって、生と死が偶然に支配されているものであり、また両極にあるものではなく連続していることを悟るのだった。

(百字)

内容の理解

- 1 一つ間違えれば大惨事、
- 2 自分は死ぬところだ、
- 3 自分が電車に跳ねられても死ななかつたのは、自分にはしなければならぬ仕事があるからだとは思えなかつた。
- 4 ウ
- 5 ①蜂の死骸が首に引かれていくこと。
- ②蜂の死骸
- 6 ウ

を尽くして逃げ回っている様子(一五七・二)をさしている。

主語も「それ」と考えてしまいがちだが、どうだろうか。「それは」全く動かずにうつ向きに転がっている「いかに死んだもの」という感じを与える(一五四・一三・一四)蜂の様子をさしている。「それ」は「自分」に「いかに静かな感じを与え」るものであり、「それ」を見てみると「自分」は「寂しく感じるのであるから、感じた主体は「自分」と考えるべきである。

五 蜂の死骸(一五五・三)は自らの意思では動くことがなく、「外界にそれを動かす次の変化が起ころるまでは」「そこにじつとして」(一五五・五・六)しかないものである。そして「ありに引かれていく」(一五五・六)ことは「次の変化」の一つの例である。

①の「それ」はその一つの例をさして「次の変化が起きたとしたら」ということであり、②の「それ」は「ありに引かれて」いつでも「蜂の死骸」の静かさには変化がないことをさしている。

六 第三段落の「蜂」の描写の特徴は「忙しく立ち働いている蜂はいかに生きていっているもの」という感じを与えた。(一五四・一三・一四)「その蜂に」朝も昼も夕も、見るたびに「一つ所に全く動かずにうつ向きに転がっているのを見ると、それがまたいかに死んだもの」という感じを与える(一五四・一三・一四)とあるように、「生」と「死」の対比で描かれている。

七 顔の表情(一五六・一三)はわからなかつたが、「動作」から「顔の表情」と同じように、「ねずみ」の「一生懸命」(一五六・一三)を読み取ることでできたから、このような表現をしている。

八 第三段落で「自分」は「蜂の死骸」を見て「死」の持つ「静かさに親しみ」(一五五・八)を感じていたが、第四段落では「ねずみ」が「死に決まつた運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っている様子」(一五七・二)を見て、「寂しい嫌な気持ち」になつていく。それは「死」の静寂の前にある「動騒」を「恐ろしい」(一五七・六)と感じたところから生まれている。

九 「ねずみ」が「死に決まつた運命を担いながら、全力

五 ねずみの必死の動作に、助かりたいとする一生懸命な願望が表れていると考えたから。(三十九字)

八 「死」の静寂に到達する前に、苦しみがあることを見せつけられたから。

九 イ

十 自分のけがが、致命的なものではないとわかつたから。

十一 ア ②ウ ③エ ④イ

十二 死の予感を感じさせながら、不気味ないもりの死の場面にたないでいく役割。

十三 生と死が偶然に左右されてしまう運命を背負っている寂しさ。

十四 生きている気がした。

十五 ア・エ

十六 読解のポイント

十七 「寂しい考え」は「こんなことが思い浮かぶ。それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだつた。」(一五三・八)と繰り返して述べられている。ここで、「それ」とは「思い浮かんだこと」をさしているのだから、次に「こんなこと」がどこをさしているのかを考えてみる。するとそれは「けがのこと」になるが、その具体的な内容の部分を抜き出すと解答のようになる。

十八 「クライブがそう思う」の「そう」がどこをさしているかを考える。「中学で習つた「ロード・クライブ」という本」(一五三・一三)からの引用部分を探せばよい。

十九 「実は自分もさういふふうになつて来た出来事を感じたかつた。そんな気もした。しかし妙に自分の心は静まつてしまつた。」(一五三・一四)とあるように、「クライブ」と同じように自分自身を「激励」(一五三・一四)したかつたが、「さ」を感じたかつた。そんな気もした。しかし」というのは、願望を述べているので、実際のところは自分自身を「激励」するような気分にななかつたことを意味している。

二十 それは見ていて、いかに静かな感じを与えた。寂しかった。」(一五四・一五)とあるので、「寂しかった」の

空き缶 (p.76 ~ p.79)

- 漢字
- 1 調 2 廃校 3 通達 4 漏 5 輝
  - 6 磨 7 専用 8 率直 9 選抜 10 詩
  - 11 微妙 12 脳裏 13 看護 14 平穩 15 明滅
  - 16 娘 17 粉
  - 1 1 はなは 2 さつぱつ 3 へきめん
  - 4 さようせ 5 しきしだい 6 ついとう
  - 7 は 8 せ 9 けんあん 10 ふにん
  - 11 へだ 12 る 13 さ 14 てんがい
  - 15 ひたい 16 よくよう 17 めいふく

語句

- 1 初めからそこに属して、今に至っていること。
- 2 あれこれ迷つて、なめらうこと。
- 3 かばい、守ること。
- 4 心配事や不快なことに頭をしかめる様子。

1 肩 2 足 3 目

1 洪水の後の悲惨な状況に、目がくぎづけになつた。

2 国王の側近は、虎視眈眈と地位を狙つていた。

要旨の整理

ア原 イ講堂 ウ西田 エ大木 オ出発点

カ野田 キきぬ子 ク骨

●要旨整理のポイント

・母校を三十年ぶりに訪れた「私」たち、原爆という共有の運命を背負いながら、それぞれ個々の人生を生きていた。この個性と共有性が、この小説の構成に関わっていることを理解することが大切である。

・第一段落は、母校を訪れた「私」たちが過去を回想している場面である。過去に戻つたかのように思ひ出を語りつつも「アルミサッシュ」の窓枠に違和感を抱くなど、過去と現在の交錯の中で回想は深まっていくな。

・第二段落では「講堂」に対する「私」たちは原爆の「追悼会」のことを思い出し、「講堂」の入り口で立ちすくむ

漢字

- 1 衝撃 2 喪失 3 攻撃 4 除 5 空襲
- 6 消滅 7 破壊 8 愛着 9 流通 10 投資
- 11 主役 12 閉鎖 13 参入 14 交換 15 導
- 16 象徴 17 構図
- 1 おそ 2 まぎ 3 わんがん 4 き
- 5 いっそう 6 じつぞん 7 きようれつ 8 しゅどう
- 9 びちく 10 おぎな 11 きんゆう 12 しば
- 13 いた 14 ほうかい 15 しょうへき 16 とうらい
- 17 そうさ

語句

- 1 1 すっかり燃えて跡形もなく灰になってしまったこと。
- 2 2 あつげにとられたり、あきればたりして、我を忘れてしまうこと。
- 3 3 今の地位があるのは努力のたまものにはかならない。ほかならない君の頼みなので、何とかしよう。
- 2 事故でかけがえのない人を失う。

要旨の整理

- ア 衝撃 イ 戦争 ウ 遠近感 エ グローバリズム
- オ 情報 カ ポスト キ 経済 ク 金融
- ケ 交換可能 コ IT革命 サ 金融自由化 シ 構図
- ス 場

【要旨整理のポイント】

- 第一段落では全体のキーワードとなっている「遠近感」という語句の意味を正しく理解するとともに、「遠近感」の喪失が第二段落以降の主題である「グローバリズム」と密接な関係にあることを読み取る。
- 第一段落では、アメリカと日本の戦争に対する体験の違いを読み取りながら、「遠近感」について理解を深める。

第二段落では、資本主義の変化の結果、グローバル経済システムが成立したことを読み取る。さらに、グロ

ーバル経済が成立するところと「遠近感」の喪失が合致することに注目する。

第三段落では、まず、IT革命や金融の自由化という世界の流れがグローバル経済システムや「遠近感」のない世界を作り上げたことを読み取る。次に世界貿易センタービルの攻撃は、「遠近感」のない世界で活動していたかのように思われる人々も、実は「交換不可能」な「遠近感」のある「場」で生きていたという事実を読み取る。

●要旨

- ア 原爆 イ 喪失 ウ IT エ 流通 オ テロ
- カ 交換 キ 場

●百字の要旨

アメリカは「遠近感」を失ったグローバル経済システムの中で一人勝ちだったが、9・11によって、グローバルズムの中に生きる人々は交換不可能なもので、我々は遠近感のある「場」で生きていたことに直面させられた。

(百字)

【内容の理解】

- 1 ア 1 アメリカ ア 喪失 イ 本土(自国) ウ 攻撃
- 2 日本 工 自国 才 戦争 力 遠い
- 3 日本 牛 大空襲 ク 原爆 ケ 土地
- 4 遠い土地を攻撃していたから。(十四字)
- 5 ア 1 アメリカは一度も本土を攻撃されたことのない国である。
- 6 「遠近感」のないシステム
- 7 ア 1 ポスト工業化社会
- 8 世界中で情報やカネを瞬時に自由に動かせること。(二十三字)
- 9 金融の自由化がなされず、資金の動きも国境に縛られている状態。
- 10 世界中で情報やカネが瞬時に自由に動いていく。(二

あることを読み取る。

- 1 一九一ページ8行目に「それがグローバル経済なのである」と述べていることから、直前の「世界中で情報とカネが瞬時に自由に動いていく」とこと判断できる。
- 2 「世界中が等価」ということは「東京」も「ロンドン」も「香港」も「関係がない」ということである。世界の各地が「交換可能」であるということである。
- 3 「IT革命」が「グローバル化の技術的な裏打ち」であったと述べていることから、「IT革命」が「世界中で情報とカネが瞬時に自由に(一九一・8)動かすことを技術的に可能にしていた」と素直に考えればよい。
- 4 裏打ちとは、紙や布などの裏面に紙や布などをはって丈夫にすること。また、別の面からの証拠だて、裏づけのことだ。

- 1 一九三ページ1〜4行目を的確に読み取ろう。アメリカは「遠近感」のない世界として捉えられ、その象徴が「貿易センタービル」であった。ところが、そこで生活していた人々は、「遠近感」のない世界に生きていたと思われたが、実は「遠近感」のある「場」で生きていて、「交換不可能」(一九三・3)なかけがえのない存在であったことに注目しよう。
- 2 直後に「こうした世界の構図」(一九三・15)とあり、遠近感なき経済システムと遠近感の中にある私たちとの間に対立の構図が存在していると述べる。だが、「遠近感」のないグローバル経済システムの中に生きる我々が存在している「生きている「場」というものは、実は「交換不可能な」「遠近感」ある「場」だ、ということが全編を通して筆者の主張である。このことを説明すればよい。キーワードとしては「遠近感」「交換不可能」を使つてまとめた。

- 1 直後に述べているように、現在では世界中の遠く離れた所とでも、瞬時に情報やカネがやりとりできる。そういうやりとりが、典型的な例として自宅のパソコンからでも可能であることから、「マウスのクリックだけでできる」と表現している。
- 2 「日本市場が閉鎖的だと非難された」(一九一・10)のは世界の流れである「グローバル経済システム」に順応しておらず、「壁」を反対の立場に立っていたからで

十一字

- 1 世界の各地が「交換可能」になったこと(十八字)

四ウ

グローバル経済の仕組みの中にいる人々も、遠近感の中にあつて交換不可能なものであるということ。(四十六字)

【読者のポイント】

- 1 設問の部分の直後に「遠近感」を喪失した世界の中で、まさに「遠近感」に直面させられる」とあるように、「生きている意味」の戦争」とは「遠近感」を感じさせる戦争である。「遠近感」の喪失について述べた第一段落に「そこに生きる……実存を支えている」(一九〇・1〜2)とあるので、ウが正解。アは「遠近感」を失っていたころのアメリカの戦争認識。イは一九八六ページ6行目に似た部分があるが、肝心な「自分が生まれ育った……」以下の内容が抜けている。グローバルズムは戦争から「遠近感」を奪う側なのでエも不適切。
- 2 アメリカと日本の相違を対照的に整理しながら、次の項目における相違をまとめて「遠近感」について理解しよう。
- 遠近感の理解の有無
- 戦争の体験の相違
- 喪失感や悲しみの実感
- 3 日本人は「東京大空襲」や「原爆」の体験から「すべてが失われ、自分自身も失われてしまうようなショック」(二八九・7)を感じたが、それはあくまで「自らの土地で起こったから気づいた」(二八九・9)のであつて、「遠い土地を攻撃しているとき」(二八九・9)には気づいていなかった点に注意しよう。なお、そのことを一般化した「遠近感が喪失されていたから。」も可。
- 4 「自分が生まれ育った土地が破壊され、灰燼と帰すとき」(二八九・7)人は「自分自身も失われてしまうようなショック」(二八九・8)を感じると筆者は述べて



語句・句法

①もつて・そして・して。

2 による・よる。基づく。従う。

3 たる・十分である。満足する。

4 すすぐ・ぬぐう。払いのける。

5 ここにおいて・そこで。こうして。

【補足説明】

4では「雪辱」という語を思い浮かべてほしい。

●【以】の読み方と意味

もツテ＝単純な接続を示す。

手段・理由・対象・時間・資格などを表す。

教科書本文のように接続を示す場合は、返り点

がつかないことが多い。

もツテス＝手段として用いる。

ひきキル＝率いる。

●【因】の読み方と意味

より＝よる。基づく。従う。

「由」を用いる場合もある。

よりテ＝そこで。だから。

接続詞的に用いる形。

①大夫二人をして往きて先んぜしむ。

2 庸人すら尚ほ之を羞づ。況んや将相に於いてをや。

3 霜葉は二月の花よりも紅なり。

4 豈に報いを望まんや。

【補足説明】

1「焉」は置き字。

●抑揚形

抑揚形とは、前の文の内容を軽く抑え、後の文の内容

を強く揚げて言う句形。重点は後の文にある。

A 且(尚)猶(猶)B。況(況)C乎。

(AでさえBだ。ましてCはなおさら(B)だ。)

「況」のかわりに「安」を用いることもある。

●「豈」を使う句形

豈(ぞ)乎(哉)。(どうして、いか、いや、くない) 反語形。

「豈」は疑問詞だが、疑問形はない。

豈不(ぞ)哉。(なんとではないか)。

「豈」の下に否定詞がきたら、感嘆形。

【要点の整理】

ア燕 イ平 ウ賢者 エ斉 オ燕 力燕

キ斉 ク賢者(賢士) ケ先王(父) コ千金

サ千里 シ死(死んだ) ス死(死んだ)

セ千里 ソ千里 タ賢者(士) チ魏(郭魏)

ツ賢者(士) テ燕

【要点整理のポイント】

本文の導入部分の解説をよく読んで、昭王が賢者を招

こうとした理由を理解しよう。

燕と斉の二国については教科書三三三ページの「戦国

時代要図」を参照。

【内容の理解】

二イ

二ア

三郭魏

四エ

五至者三

六ア

七士千里馬 魏死馬骨

八ウ

九①買死馬骨五百金而返。

②不期年、千里馬至者三。

十①優れた人材を集めたいなら、まず私を重用しなさい。

②別解：大きな事業を行うにはまず身近なところから

始めるのがよい。

③何事も言い出した者から実行せよ。

【読解のポイント】

①昭王が即位して間もないことを押さえて。国を立て

直すことが急務である。ここでの「問」は「訪問する」

の意味。戦いで生き残った者や遺族を見舞ったのであ

る。アでは「質問する」の意のようである。また「用

生」の意味合いが薄い。ウでは「問生」につながる

い。エは訪問先でそうすることもあったかもしれない

が、それだけに過ぎない。

②「報」には大きく分けて「お返し」と「知らせる」の意味が

あるが、ここでは「報復する」という意味。直前の「斉

因・孤之困・而饗彼燕」(三三・五)に着目しよう。

何のために賢者を招こうとしているかを考えてほしい。

③「先生」はもともと「先に生まれたもの」という意味で、

先輩・年上の相手に対する尊称。昭王が郭魏に言った

言葉であることを忘れないようにしたい。

④直前の「事」は「師事する」の意味。「共・国・以雪」先

王之恥」(三三・七)ができる人物を求めているのであ

る。アは郭魏のたとえ話。イ・ウの「先王」は昭王の

父であり、昭王は事情をよく知っているはずである。

⑤郭魏の言葉から、たとえ話の部分と提案の部分とを分

けてみよう。「今」(三三・六)に注目しよう。直後の「王

は「古之君」ではなく、昭王のこと。

⑥「死馬且買之。況生者乎」(三三・四)に着目。イは「肝

心の骨」が意味不明。ウは「千里の馬を大金で買えば」

が誤り。馬は育つのに数年かかるから、君の要求にも

応えていない。エは本文のどこにも書かれていない。

⑦「士」は「賢者」(三三・五)と同じ。昭王が賢者を求め

たように、「古之君」は何を求めたのかを考えよう。

⑧「魏」は価値のないものにたとえられている。

⑨郭魏の提案は一見彼だけに都合がよいもののようであ

る。たとえ話をうまく使うことにより、昭王を説得

している点に着目しよう。魏はすでに採用されている

し、昭王はすでに賢者を捜しているのでア・イ・エは

外れる。

⑩①魏を厚遇している記述。②で魏は何にたとえられた

かを思い起こそう。③君の望みがかなったことを表す

文。

⑪辞書などを引いてみよう。現在ではもとの意味とは異な

った意味で使われていることを確認しよう。